

うちなあ点描
第百十四回

歴史的建造物の復元・修理事例(四)

「弁財天堂」の保存修理について

文・平良啓 Hironu Taira

●歴史的経緯と建物の特徴

首里城の北側に建っている弁財天堂は、十五世紀に当時の朝鮮王朝から贈られた経典の方冊蔵経を納めるために、尚真王代(一四七七〜一五二六年)に創建された。その後、一六〇九年の薩摩侵入によって建物は破壊され、蔵経も散逸した。そして尚豊王代(一六二二〜一六四〇年)に修復されて円覚寺にあった弁財天像を室内に安置した。それが建物名称の由来となっている。弁財天堂の戦前の写真には、庶民がそこでお祈りしている様子が写っている。去る沖縄戦で建物は消失し、昭和四十三年に復元されたのは以前に紹介した通りである。

弁財天堂はほぼ正方形の平面形状で、前面の間は床板が張られた広縁となっている。内部には中央間があり、仏壇と左右に押入が備わっている。屋根は方形造赤瓦本瓦葺で、頂部には露盤宝珠の焼物が設置されている。露盤の側面には蓮花文様が施され、宝珠は火焰宝珠の形となっている。沖縄の伝統的木造建築物でこのような屋根形式は珍しい。

●保存修理の内容

以前から屋根の一部に陥没が見られ、漏水が続いている状態であった。小屋裏の母屋や垂木、隅木などにシロアリや腐朽菌による被害が出ており、床板や外壁に欠損、ひび割れが生じていた。そのままの状態を放置すれば、ますます老朽化が進み、耐久性に問題が生じることが指摘されていた。そこで調査・実施設計業務を経て、平成十九年九月から平成二十年一月にかけて沖縄県教育庁文化課の発注で県内の専門業者によって保存修理工事が行われた。

瓦はすべて取り外し、破損していた瓦の補充には新たに手作り瓦を使用している。瓦職人によって野地竹と葺土、漆喰を用いて伝統的工法で葺き直された。補足木材は主に九州産のイヌマキを使用している。そして「平成十九年度修補」と記した焼印を見え隠れ部分に押し、後世の人たちに伝えるようにしている。なお、新たに使用する木材は既存の木材と色違いがはっきりしすぎるために、「古色塗り」という方法で薄く色をつけてなじませている。「真壁ちな」の事例と同

じく、極力既存の材料を生かすことを心掛けている。

●保存修理工事の大切さ

建築物は建てられた時点から常に過酷な気候に晒されており、特に木造建築物はシロアリと腐朽菌などによって木材が蝕まれる状況にある。先人はこれらに対処すべくさまざまな工夫を行ってきた。例えばシロアリなどに強い木材を使う、

礎石の上に柱を設置して湿気に対処する、直接雨が吹き込む雨端柱にイヌマキの自然丸太を使う、外壁を縦板張目板打にして速やかに水を下に流す、開口部の上に霧除と呼ばれる庇を設けて雨の直接の浸入を防ぐなど、感心させられることが多い。

建物には永く存在し続けることができる。これからも常にそのような気持ちで歴史的建造物を愛護し続けたいものである。円鑑池の中の島に、保存修理を終えて本来の姿で蘇った弁財天堂には、安寧を祈る地元の人々や観光客が訪れる。ここで展開されたさまざまな歴史に思いを馳せている。私は特にこの場所が好きである。

